

## 生活臨床における心理職の内的体験

—児童養護施設における職業的アイデンティティ形成のプロセスに着目して—

田畑 奈緒

### I 問題と目的

児童養護施設は、虐待など様々な事情をもった子どもたちが、第2の家として暮らす生活の場である。

内海 (2011) は、福祉領域における心理臨床の特徴の1つとして、生活臨床的な視座が求められるという点を挙げている。また、福祉領域において、明確な治癒や改善が捉えにくいゆえに、援助者の情緒的消耗や、援助対象者への共感に伴う疲弊、外傷的な体験の再現を目の当たりにすることによる二次的な外傷性ストレスを受ける傾向を挙げ、それは心理職も例外ではないとして、これらに関する知識の共有、他職種との連携の必要性を述べている。これらのことから生活臨床に携わる心理職は、生活臨床的な視座を備え、生活臨床特有の困難さを他職種と共有し、連携するスキルが求められていると考えられる。

高橋 (2010) が行った調査では、心理職の配置率は84.8%で、そのうち常勤率は42.6%であり、雇用形態が安定していない。

著者が全国の児童養護施設を対象に行った予備調査では、心理職の必要性が高まっている一方で現場での配置状況との間にずれがみられた。

施設での心理療法は子どもたちの生活空間で行われるため、援助構造が曖昧で、心理職は焦りや戸惑いなど、特有の困難が生じやすいことが指摘され(綱川, 2009; 檜原, 2013)、生活臨床における心理職の葛藤が窺える。また、雇用形態や配置率が施設によって様々であるため、児童養護施設で働く心理職の支援が確立されづらい状況があり、専門職としてのアイデンティティを形成しづらいという指摘(井出, 2005; 綱川, 2009)もされている。心理職の生活場面への参加や生活支援の実施については様々な意見があり、森田 (2006) は、児童養護施設においても心理療法の空間は生活場面から離れている必要がある、治療と生活の場をきちんと分けるべきであると主張している。しかし増沢 (2012) は、生活臨床を「子どもが日々暮らす生活の場を、ケースの理

解および回復と成長の中心的場と捉え、子どもの回復と育ちに影響を与えている環境、活動、援助者の対応、子ども集団などを、回復と育ちに向け設定、工夫、方向付けをしていく営み」と定義し、生活臨床の中に心理療法の可能性を見出している。

内的体験に関しては、Heavey & Hurlburt (2008) は、自然発生的な、思考、感情、感覚などと定義している。なお、本研究では内的体験を「個人内で体験される様々な感情や気持ち、思考」と定義する。

児童養護施設における心理職のアイデンティティの問題について検討したものはあるが(綱川, 2009)、職業的アイデンティティ形成のプロセスについて質的に研究したものは見当たらない。

そこで本研究では、児童養護施設で従事する心理職を対象に支援の実際を語ってもらうことを通して、心理職の内的体験について考察し、職業的アイデンティティ形成のプロセスを理解することを本研究の目的とした。本研究により、児童養護施設の生活臨床における心理療法の可能性について、示唆を得ることができると考えられる。

### II 方法

児童養護施設に勤務する心理職12名を対象に質問紙調査(バーンアウト尺度(MBI)、ワーク・エンゲイジメント尺度(UWES)、多次元自我同一性尺度(MEIS))を実施すると共に、業務内容や業務時の感情について半構造化面接を行った。本研究は、職業的アイデンティティの形成に着目しており、grounded theoryによる研究がふさわしいといわれている(Charmaz, 1995; Stern, 1980)ことから、分析には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)を用いて分析した。

### III 結果

#### 1) 質問紙調査の結果

先行研究では、UWESとMBIとの相関はすべて負であり、UWESと、MBIの下位尺度である「個人的達成

感の低下」との間に、最も強い負の相関が見られたとされている (Maslach et al., 2001; Schaufeli et al., 2002)。本調査の結果ではいずれも有意ではなかったが、負の相関の傾向が見られた(「個人的達成感の低下」と「熱意」( $r = -.342, ns$ )、「個人的達成感の低下」と「没頭」( $r = -.444, ns$ )。MEIS の、「心理社会的同一性」は、UWES の「活力」と「熱意」との間にそれぞれ正の相関が見られ(「心理社会的同一性」と「活力」( $r = .520, p < .10$ )、「心理社会的同一性」と「熱意」( $r = .644, p < .05$ )、「活力」や「熱意」が高いことで、「心理社会的同一性」も高くなると考えられる。つまり、就業中のエネルギーや仕事への関与、誇りが高いと、職業と自己との一体意識も高いと考えられる。また、UWES の「活力」と、MEIS の「自己斉一性・連続性」との間に、強い正の相関が見られた( $r = .711, p < .01$ )。

## 2) インタビュー調査結果

分析の結果、16 のカテゴリーと 77 個の概念が生成された。職業的アイデンティティ形成のプロセスは、①仕事を始め、戸惑いや衝撃など、様々な気持ちを抱いている『混沌の時期』、②難しさや葛藤を感じ、働き方を模索、試行錯誤している『模索・試行錯誤の時期』、③施設での自分の在り方を意識し、自分の仕事に目的や意味を見出しながら仕事をしている『意味づけの時期』、④やりがいや意欲を感じ、仕事をしている『発展の時期』、⑤子どもたちや同僚、職場の環境などにありがたさや感謝の気持ちを感じ仕事をしている『感謝の時期』の 5 段階がスペクトラム状に展開し、⑥それに影響する『継続要因』から成るモデルが生成され、生活臨床での内的体験に基づく職業的アイデンティティ形成のプロセスが見出された。

## 3) ストーリーライン

ここで、生成された概念とカテゴリーを用いて、ストーリーラインについて説明する。以下、カテゴリーを【 】, 概念を〈 〉と示す。

児童養護施設への就職前や直後に、〈就職時の不安や困難〉、〈就職時の仕事への興味〉など、【ファーストインプレッション】をもつ。その後働く中で、心理職の【生活臨床における専門性の曖昧さ】を感

じたり、〈子どもとの関りでの困難〉や〈職員との連携での困難〉といった、【受け入れ難い思い】が表出してくる。それに伴い、〈葛藤〉や〈自身の力量に対する歯痒さやもどかしさ〉が高まり、【現状を打開したい思い】が表れ、そこから派生して〈心理職としての自己の表し方〉といった【様々なやり方の試み】が表れてくる。

働き方を模索、試行錯誤していく中で、受け入れ難いと感じていたことに【折り合い】をつけ、〈意識していること〉や〈仕事に臨む際の姿勢や方針及び自己の在り方〉といった【自分なりの指針】を持ち、〈他機関や他職種と連携や協働する大切さ〉や〈生活に入ることによるメリット〉などを感じ、【理由や目的・意義の見出し】を行いながら、施設での自分の在り方を意識して働いていく。また、〈職業決定〉に至ったきっかけが【モチベーションの維持】に繋がり、その施設で働く意義にも繋がっている。

自分の感情や仕事に意味づけをしていき、仕事への〈抱負や目標〉、子どもたちのためにも〈施設にいてあげたい〉という【ビジョン】が出てくる。更に、〈やりがい〉や〈意欲〉といった【仕事への充実感】が表れ、子どもたちや同僚を思いやる、【周囲への願い】や【周囲への感謝】に繋がる。そして、勤務を続ける中で同僚や子どもたちの入れ替わりが起これ、それに伴って 1 から関係や関わり方を構築することの【繰り返し】に至っている。

## IV 考察

### 1) 生活臨床における心理職の内的体験

【様々なやり方の試み】では、職場での〈心理職としての自己の表し方〉として、服装で職種の違いを示したかったのかもしれないという研究協力者の回顧する語りが得られた。これは、児童養護施設特有の援助構造の曖昧さが、専門性の曖昧さに繋がったと考えられる。また、周囲から受け入れられていることを感じ、他職種と違う服装をする必要性がなくなってきたとの語りから、服装を用いて、他者からの認識や、自身の心理職としてのアイデンティティを保とうとしていたことが考えられた。

訪問支援では、原田・上野 (2009) が、利用者が心理職と他職種とを使い分けていることを見出し、

仲 (2016) は「話を聴く」支援の中に、心理職の支援ニーズが見出せる」と示唆している。インタビューの中でも、「そのやっぱ子どもって一番心理職を使うのがうまいなと思ってて」(Jさん)、「担当職員に話す前に、『何て言ったらいいか一緒に考えて』とか言ってきたりすることもありますし」(Cさん)という語りが得られ、子どもが他職種と心理職とを使い分けていることや、心理職の支援ニーズとして「話を聴く」ことに心理職のニーズが存在していると考えられる。

## 2) 内的体験と職業的アイデンティティ

本研究のバーンアウト尺度の結果は、加藤・益子 (2012) の児童養護施設職員 374 名を対象に行った研究と、下位尺度得点の平均についてはほぼ同程度であった。しかし「個人的達成感の低下」については、先行研究 ( $M = 2.54$ , 加藤・益子, 2012) よりも高い値 ( $M = 3.47$ ) となっており、3つの下位尺度のうち、最も差が大きかった。加藤・益子 (2012) は「個人的達成感」が減退している人が多いことについて、「成果が見えにくいこと」や、「職員個人の成長や力量を評価する客観的指標や組織内の仕組みに乏しいこと」、「職員が費やす労力と比較して、なかなか子どもの状態が改善されない」ことなどを理由として挙げており、本研究の対象者が個人的達成感を感じづらくなっていることが示唆された。ただし本研究は、質的研究を主としており、先行研究 (加藤・益子, 2012) とは研究対象やサンプル数が異なるため、サンプル抽出の偏りにより、このような結果となった可能性がある。

また、「情緒的消耗感」の高さに対し、「個人的達成感の低下」が低く、「活力」や「熱意」が高い対象者もみられた。更に、「活力」や「熱意」が高いことで、「心理社会的同一性」も高くなることが明らかとなり、【受け入れ難い思い】があっても、〈自身の力量に対する歯痒さやもどかしさ〉を感じつつ模索し、【自分なりの指針】を立てて【理由や目的・意義の見出し】を行い、【仕事への充実感】をもって自身の職業的アイデンティティを形成しながら仕事をしていることが示された。

## 3) 生活臨床に携わる心理職に求められるもの

児童養護施設の心理職は、大半が生活に入り『意

味づけ』を行うことで職業的アイデンティティを形成していることが明らかとなった。淵野 (2016) は、乳児院での事例を通し、「Aを安心させるために、Aのペースに合わせて入退室をし、生活場面でも関係作りをしたため、Aは徐々に遊戯療法に取り組めるようになったのであろう」と述べ、生活の中で心理職としての専門性が発揮される可能性を示唆している。生活臨床という場において、心理職には、共に日常を過ごしながら信頼関係を構築し、子どもたちのアセスメントに必要な情報や強みを感じ取るスキルが求められていると考えられる。

## 【引用文献】

- Charmaz, K. (1995). Grounded theory. In Smith, J. A., Harre, R., & Langenhove, L.V. (Eds.), *Rethinking methods in psychology*. Sage: Thousand Oaks, CA, pp. 27-49.
- 淵野俊二 (2016). 乳児院における遊戯療法を活用した心理的支援の拡がり—境界性パーソナリティ障害の母親から虐待を受けた女兒の事例を通じて—. *心理臨床学研究*, 34 (2), 184-195.
- グレッグ 美鈴 (2001). アメリカの CNS が職業的アイデンティティを確立するプロセス. *看護*, 53 (10), 107-111.
- 原田徹・上野光歩 (2009). 精神科診療所における臨床心理士の「訪問」について. *病院・地域精神医学*, 52 (1), 30-31.
- 仲沙織 (2016). アウトリーチサービス利用者のニーズから見た心理職の可能性の検討. *日本保健福祉学会誌*, 23 (1), 65-71.
- 檜原真也 (2013). 児童養護施設におけるプレイセラピーと生活援助の協働. *心理臨床学研究*, 30 (6), 809-820.
- 網川弘樹 (2009). 児童養護施設における心理士のアイデンティティの問題. *おおみか教育研究*, 3, 21-30.